

品質向上を目指す 水稻の適期収穫について

一 気象と生育の経過

今年の梅雨入りは、平年どおりの6月7日で、梅雨明けは平年より1日遅い7月20日でした。気温はおおむね平年並みで推移しましたが、降水量は6月中の3つの台風に加え、梅雨前線により、平年並みから大きく推移しました。昨年の高温少雨の梅雨とは打って変わり、今年の梅雨は曇天や降雨の多い梅雨らしい気象でした。

水稻の生育については、田植後の苗の活着は順調でした。日照不足の影響で分げつの発生がやや緩慢となりましたが、現在はほぼ平年並みとなっています。

二 今後の気象と生育の予測

気象庁が8月25日に発表した3か月予報（9月～11月）では、平均気温が「高い確率60%」と暑くなることが予報されています。

このため、出穂後も高温傾向が継続すると見られることから、高温登熟による品質や食味の低下に注意が必要です。

三 高温年の登熟の特徴

水稻は登熟期間に高温にさらされると、品質が低下しやすくなり、さらに品質の低下に伴う食感や食味の低下を招きます。

【白未熟粒】

出穂後20日間の平均気温が27℃を超えると、背白粒、腹白粒、基部未熟粒といった白未熟粒の発生が増加します。対策として出穂前の追肥（穂肥）が有効とされています。

【胴割粒】

米粒の胚乳部に亀裂を生じる現象です。早期落水や刈遅れによる籾含水率の低下、乾燥調製の際の過乾燥で増えることが知られています。

四 今後できる技術的対策

高温障害に対する最も効果的な対策は、高温に強い品種選定と出穂前の生育診断に基づく追肥の施用ですが、これからできる対策は以下のとおりです。

【間断かん水】

出穂期後1週間深き水管理をした後は、入水と落水を数日単位で繰り返す間断かん水を行います。根の活力維持と登熟向上が目的です。

例えば1週間サイクルとする場

合、日曜日に水を入れて、水曜日にかけて自然落水し、次の日曜日に再び水を入れて、水曜日にかけて自然落水する、といったサイクルとなります。

【早期落水の防止】

梅雨の影響で中干しが不十分であった場合は、間断かん水の際に田面が露出する期間を長めにしましょう。

収穫期になっても土壌が柔らかいと刈遅れの原因になります。土壌を固くしようと早期落水を行うと品質等に影響が出るので、できるだけ間断かん水で少しずつ固くしておくといでしょう。

【早めの収穫】

刈取適期の目安は表のとおりですが、籾水分が25%以下に低下したら適期期間の早い段階で収穫します。

【乾燥】

乾燥機に投入後、一晩から半日程度通風乾燥を行ってから、温風乾燥を始めます。

五 生育予測アプリ「咲き玉くん」

「咲き玉くん」は、埼玉県農業技術研究センターで開発した農作物の重要な生育転換点や代表的な作業適期を予測できるアプリケーションです。水稻の「移植日」を入力すると、「出穂期」や「収穫

表 品種別収穫適期の目安

品 種 名	出穂後日数	登熟積算気温
彩のきずな	35～44日	900～1100℃
キヌヒカリ	37～45日	920～1050℃
彩のかがやき	42～55日	1010～1250℃
えみほころ	39～48日	1000～1200℃



こちらの二次元コード
からご覧ください！

適期」などの予測が表示されます。麦類・大豆・ゴマ・ナシの収穫適期等も予測できます。作業計画を立てる上での参考に御活用ください。利用に当たっては、「咲き玉くん」利用規約を必ず確認いただき、本規約に従って利用してください。